

大伴坂上郎女論 中

岡 田 喜 久 男

前稿（「日本文学研究」第二四号）で、大伴坂上郎女（以下多くの場合郎女と略記する）の、『万葉集』における実像を、多様性の面から把握、多様な歌、多量の資料的記載の残された理由を三点にまとめた。

その第一は、『万葉集』の最終編纂者・大家持と郎女は甥と叔母の關係にあり、娘の婿ともなった家持が、豊富な資料と見聞を記録したという傍倅。

第二は、大伴家の家刀自的な存在であった郎女が、晴の場で活躍する機会が多く、又そこで巧みに歌を詠む才能を持っていた事実。

第三に、郎女自身の虚構を好む性向と、現実を逃避しようとする気持が多様な歌の世界を切り開いたと考えられる事。

以上の三点中、第一・第二については資料的にかなり客観的な事実として指摘し得たと思うのであるが、郎女の歌才と第三の項については、本稿で中心的に論証していかなければならないと思う。特に「現実を逃避しようとする気持」と結論ずけるのは、その前段階

大伴坂上郎女論 中

で、郎女が直面し、乗り越えなければならなかった現実の重みを確認した上での事であろう。

郎女の歌を理解する為には、大伴家を思う気持、いやもつと端的に言えば、大伴家の存在を世に問う彼女の志を考えなければならぬと思う。

大伴家持が、大伴氏の頭領として、氏の繁栄を希って心を砕いたことは、『万葉集』の中に随所に見る事が出来る。有名な、

「族を諭す歌」4465の末尾では

空言も祖の名絶つな 大伴の氏と名に負へる ますらをの伴

と、又その反歌でも

磯城島の大和の国に明らけき名に負ふ伴の男心つとめよ

4467 剣大刀いよよ磨ぐべしいにしへゆさやけく負ひて来にしその

名ぞ

のように、大伴氏の置かれた立場からの、悲痛な叫びが聞えてくる。この歌は、左注によって分るように、大伴氏の長老で出雲守であった大伴古慈妻が、淡海三船の讒言によって解任された事件によって生れた。事件については、『続日本紀』の記事によればそれ程

単純なものではなかったようであるが、大伴氏の勢力が殺がれる事件であったことだけは間違いない。

翻つてみれば、この事件（天平勝宝八歳（76年））の十年程前（天平十六年）にも、家持が柱とも頼む、安積親王が薨ぜられたが、その時家持は長歌二首とその反歌四首を詠み皇子の死を嘆いた。その最後の短歌で

480 大伴の名負ふ鞞帯びて万代に頼みし心いつくか寄せむ

と詠んでいるが、ここにも大伴の家と切り離すことの出来ない所で、家持の詠歌態度が窺える。

又家持の絶唱三首

4290 春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも

4291 我が宿のい笹群竹吹く風のかそけきこの夕かも

4292 うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば

が詠まれた天平勝宝五年（七五三年）、家持は最後の歌の左注で「春日遅々にして鶴鷹正に啼く。悽惻の意歌にあらずしては撥かたきのみ。よりにてこの歌を作り、もちて締緒を展ぶ。」

と述べている。「ひとり思う」家持の脳裏に去来するもの、雲雀の鳴く春のよき日につらく悲しい思いをする原因が何か明かにしてないが、単なる詩人の憂愁だったとは思えない。

ところで、邸女の集中最後の歌は、越中守である夫・家持とともにある娘大伴坂上大嬢へ贈った420・421で、その長歌の末尾は（天平勝宝二年の作）

4220 …かく恋ひば老いづく我が身 けだし堪へむかも

とある。娘への、遠くにある母親の嘆き、と一般的な感情と見ることも出来るが、その歌を最後に、家持が何も邸女に触れることがないのからしても、天平勝宝五年には邸女は既に没していたのではなからうか。「悽」は説文解字に「痛也」、「惻」は同書に「失意也」とあるが、「悽惻」を邸女の死、即ち家持を十四才頃から背後で支えてきた叔母にして義理の母の死、から来る悲しさと結びつけることも可能であろう。家持の私世界と公世界については、川口常孝氏が「大伴家と『歌日記』」（『万葉集を学ぶ第八集』有斐閣選書所収）の中で次のように適確に指摘されている。

わたしたちは従前も「公」「私」の語を使ったが、家持は公性と私性の葛藤を、苦渋の面貌をもつて生きざるを得なかった、『万葉集』中、最終・最大の作家であった。その源は、彼が神代以来の名門に生を享けたということに起因する。氏族がもつ共同体意識は、早くして彼の体質をつちかったのである。とともに、長じては、父旅人や憶良らの個性の文学を、その身辺に見たのである。ことに憶良の横紙破りが、はなはだしい出血の痛みを担保にしてなされていることを、家持は敏感な魂をもつて感じとったはずである。こうして、自己世界への沈潜の志向と氏族への回帰の要請とが、生涯にわたって家持の内部を洗うことになる。

家持の、大伴氏への限りない愛情と危惧は、結局死後まで彼を束縛した。家持は延暦四年（七八五年）八月六八才で多賀城に没したが、二十余日後には、藤原種継射殺の主謀者として、息子永主とともに遺骨は隠岐へ配流され、その名譽が回復するのはこの後二十一年目の延暦二五年であった。

このような、自己の所屬する氏や家を愛する氣持が、時には天皇家にとつても目に余る程であつたのは、「允恭紀」四年秋九月九日みことのりの詔に、

上古治むること、人民所を得て、姓名錯たがふこと勿なし。今朕われ踐あまつしづりて、ここに四年。上下相争ひて、百姓安からず。或いは誤りて己が姓を失ふ。或いは故に高き氏を認む。

とあり、同月二十八日の詔にも

群卿百寮及び諸の国、造等、皆各言さく、「或いは帝皇の裔、或いは異しくして天降れり」とまうす。

と、群臣の実態が述べられている。このため、有名な甘藷丘での盟神探湯かたぢ(神に誓つて、手を熱湯に入れ、ただれた者を邪とする一種の神判)が行われ、「是れより後、氏姓自づから定まりて、更に詐る人無し。」の好結果を生んだのである。「古事記」の序文も、天武天皇が「古事記」撰録の契機として

朕聞く、諸家の賈たる所の帝紀及び本辭、既に正実に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に當りて、其の失を改めずは、未だ幾年をも經ずして、其の旨滅びんとす。

の状態を放置し得ないと述べられた、と伝えてゐる。氏姓制度が律令制度へ移行する時に當つては、氏姓の尊卑が蔑ろにされたが、天武天皇はこれを反省し、社会の安定のため、延いては天皇中央集権のために、諸氏族を新制に組み入れようとしたのであつた。そして一方では、天皇家の輝しい伝統が称揚され、万葉最大の歌人柿本人麻呂は歌を以つてそれに大きく貢獻したことは万人の認めるところである。

このような大きな流れの中にあつて、武を以つて常に天皇を支えて来た大伴氏は、武力の行使によつてはもはや維持し繁栄へと向うことは困難になつてきたのである。多少の問題(皇太子草壁皇子の死や自然災害などの)、はあつても、持統天皇が三十一回も都を離れ吉野へ旅することが出来た平和と、巨大な盧舍那仏の建造を可能にした強大な朝廷の財力を思う時、一氏族の力で独立独歩生き延びる道は見出せなかつたのである。家持の父旅人は、天平三年六十七才で薨ずる時、大納言従二位であり、養老四年には征軍人持節大將軍として、九州へ赴いて、武門の家の頭領の面目を施している。その旅人にしても六十を越えて(六十四才?)九州大宰府へ下り、帰京(天平二年十二月)の翌年七月二十五日不帰の客となつたのであるから、最晩年に家運を上げる働きをしたとは思えない。

まさしく旅人・家持の間にあつて、大伴家を支えたのが坂上郎女であつたと言えよう。旅人は、大宰帥として着任の年(神龜五年)最愛の妻大伴郎女を失つた。その異母兄を援け、家持の養育の爲にだつたと思われるが、郎女は大宰府に下向した。それは、天平二年十一月に、旅人帰京に先立つて「帥の家を發ちて道に上り、筑前の國の宗像の郡の名兒の山を越ゆる時に作る歌」(963)、「同じき坂上郎女、京に向う海道にして、涙の貝を見て作る歌」(964)によつて知ることが出来る。後にその内容に触れるが、右二首は激しい恋の歌になつてゐる。その恋の相手が誰れであつたかは説が分れるが、これは單純に旅人を思う歌であり(勿論恋愛の歌ではなく)、その思いの背景として、大伴家を思う心があつたのではないだろう。大宰府から帰京の後、家持への贈歌(979・1620他)、大伴駿河麻

呂との贈答歌(47他)、従兄である(673・674の左注)安倍虫麻呂との贈答と、郎女は同族の人・近親者との交流を深めている。これは、既に小野寺静子氏が「大伴坂上郎女」(『萬葉集講座第六巻』有精堂)の中で次のように述べられている。

郎女の男性交流は大伴家一族の人で占められるかどうかによって、大宰府下向以前と帰京後とでは相違が認められる。すなわち、帰京後の三者は共に大伴家一族の人である。このことは、この時期の郎女の生活や立場と深くかかわりのあることで、旅人の妻大伴郎女の死後「大伴宗家の家刀自として一門の母の位置」(尾山)に就き、大伴家一族の「家刀自」としての立場にいたことを示すものであろう。……大宰府よりの帰京後における郎女は、諸氏がいうように「家刀自」として生きてきたといえよう。それがはたして充分発輝できたものであったかどうかは問題であるとしても。多くの男性との交流も、郎女が原始的共同体の中で生きた故とも説かれるが、そういう視点と共に、「家刀自」郎女の才量にも頼らねばならなくなった大伴一族の中で、郎女に自覚され、郎女が求められた「家刀自」的立場というものを無視できないと考える。

右の最後の一文は極めて大きな示唆をしているのであるが、「家刀自」郎女の才量にも頼らねばならなくなった大伴一族」というところはいかげんかであろうか。まず第一に、資料的に郎女程明瞭でないから反論しにくいのであるが、各氏族に郎女的人人はいた筈で、むしろそれが当然であったから、(460・461)の左注で、

大刀自石川命婦、餌菓の事によりて有馬の温泉に行きて、この

喪に会はず。ただ郎女ひとり留まりて、屍柩を葬り送ることすに詫りぬ。よりにてこの歌を作りて、温泉に贈り入る。
と、新羅の国の尼理願の死に際し、郎女は母の名代として葬送をとり行つたし、

神龜五年戊辰に、大宰帥大伴卿が妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。(472の左注)

とあれば、大伴宗家の旅人を助けるべく郎女は大宰府へ赴いたのである。とすれば、各氏族で、女性の中の選ばれた人(男性も同じであるが)を頼りにすることは当然の事だったのではなからうか。

ともかく郎女の精力的な同族の人との交流はその団結と無関係ではなかつたし、それは彼女の立場としてはむしろ当然の事であり、それをすぐに大伴家の衰退と結び付けるのは早計であらう。むしろ、その家刀自としての働きの一部を、「歌の世界」で果し得ると確信し、事実、「万葉集」の中でその実力を示したことを注目すべきである。然し、前稿でも指摘したように、郎女の歌を考える上で、「家刀自」的立場を考えることは大変重要で、そのことが、本稿で最初に挙げた三点を更に深く考えることでもあると思う。以下、郎女が、彼女の歌世界において、いかに大伴一族を愛し、その繁栄を願っていたかを彼女の歌を丁寧に考えることで証明してみたい。(尚歌番号は「国歌大観」による。)

二

郎女は、その生涯が「万葉集」によってよく知られることから、人と文学を考える上で最適の歌人である。それに、長歌六首・短歌

七七首・旋頭歌一首計八四首の歌数は、充分とは言えないにしても、歌人大伴坂上郎女の相貌を窺うに決して不足とは思えない。

郎女の万葉における初出は、卷三雜歌中の「神を祭る歌」（379・380）で、左注

右の歌は、天平五年冬十一月を以ちて、大伴の氏の神に供へ祭る時、いささかこの歌を作る、故に神を祭る歌といふ。

よって、氏の神を祭る歌である事が明かである。まさしく「氏」を守る神に供えらるると言う、他に例がない、然し郎女の立場を明確に示している歌であるが、長歌の末尾

……かくだにも我れは祈ひなむ 君に逢はじかも(379)
と、反歌

380 木綿疊手に取り持ちてかくだにも我れは祈ひなむ君に逢はじかも

の語句が、いかにも恋の成就を願うようにしか思はれないので、諸説が出されている。この「君」が、この頃既に没していた、異母兄にして坂上大嬢・二嬢の父である大伴宿奈麻呂を背景に詠まれたとする説

特にこの相聞歌的表現の背景には、すでに「氏の神」の一柱となつた亡夫宿奈麻呂を招き寄せる意識が強く働いていたことが推定されるのである。（『萬葉集全注』卷第三 西宮一民）
と、二年余前に没した異母兄・大伴旅人とする説

この「君」はやはり氏神の列に加わつたばかりの旅人をさしているであろう。要するに逝ってしまった氏上旅人の霊によみがえりを訴えているのではなからうか。それは、家刀自の立場にあ

る者の歌であるに違いない（「坂上郎女祭神歌」桜井満「万葉集を学ぶ」第三集所収）

の二説が有力である。かつて私は（『日本文学研究』第十四号所収「大伴旅人」讃酒歌十三首「考」）の中で、旅人の「讃酒歌十三首」は、大伴坂上郎女に対して私的に披露されたのではないかと考えたのであるが、そこに三十も年の違ふ兄と妹の間の心の通ひ合いと連帯を説きたかつたのである。そこから考えても、又大宰府を旅人に先立つて出発した郎女の歌

963 大汝 少彦名の 神こそば 名付けそめけめ 名のみを 名児山と負ひて 我が恋の 千重の一重も 慰さめなくに

964 我が背子に恋ふれば苦し暇あらば拾ひて行かむ恋忘れ貝
祖神の中で特に旅人を意識して詠まれたものと考えるのである。

そして、この切なる思いを詠ませたのは、旅人無き後、大伴家の氏上家持を（然し当時家持は十六才）補佐しなければならなかつた郎女の焦躁であつた。

続いて郎女は「族を宴する日に吟ふ歌」

401 山守のありける知らにその山に標結ひ立てて結ひの恥しつを詠んでいるが、「族を宴する」資格を有する郎女が節をつけて歌つたのは、一族の交流の場において、大伴駿河麻呂に母親として二嬢を与える許しの言葉であつた。つまり、「私は、娘二嬢とあなたが既に誓ひ合った仲である（山に山守がある）のを知らずに、娘を守らう（標結ひ立てて）」としたのは、全く恥かしい事でした。どう

か、宜しく。」とでも解釈するとよいのではなからうか。諸説があるが、駿河麻呂の和歌、

402 山守はけだしありとも我妹子が結びけむ標を人解かめやも

を見れば、右の解釈が妥当な事が分るのであろう。母親の正式な許可（結んだ標を解く）がなければ、実質的な山守（夫）であつてもどうしようもないと答え、郎女の宴の言挙げを駿河麻呂は喜こんだのである。

郎女と駿河麻呂は、右の贈答のすこし後でも（409～411）歌を詠み合つて、同じ宴かどうかは分らないが、殆んど同じ時期の歌であると思われる。これ等の歌で窺えるのは、一族の団結につながる結婚に際して、歌をもつて巧みに事を運んでいる郎女の姿である。歌が、「相聞」の部立の名でも分るように、人同士の愛情・友情を伝え合うものとしての大きな役割を持つてゐることは万人の認めるところであるが、母として娘の結婚を進行させる時に、歌の効用を利用したのは郎女の他には見当らない。これも宴の主であり、家刀自であつた郎女ならではの事である。

「七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願が死れるを悲しび嘆きて作る歌（460・461）は、左注によつて、天平七年、大伴家に数十年も滞在していた新羅の尼理願が死んだ時の歌であるが、その事情は先に挙げた左注によつて明かである。その長歌を見ると

460 栲つもの 新羅の国ゆ 人言をよしと聞かして 問ひ放くる
親族兄弟 なき国に 渡り来まして 大君の 敷きます国に
うち日さす 都しみにみ 里家は さはにあれども いかさま

に 思ひけめかも つれもなき 佐保の山辺に 泣く子なす
慕ひ来まして 敷栲の 家をも造り あらたまの 年の緒長く
住まひつつ いまししものを……我が泣く涙 有馬山 雲居た
なびき 雨に降りきや

と、新羅の尼でさえも、大伴家（時に安麻呂が氏上）を慕ひ来る様子が歌われている。結句及び左注から、母石川命婦への報告の態を為しているが、引用した歌句によつても分るように、大伴氏の自己宣伝臭の強い歌で、大刀自の代役として葬礼を取り計らつた郎女の気負いの言挙げである。

京職藤原麻呂と郎女の關係は、（522～524）の麻呂の歌に和した「大伴郎女が和ふる歌四首」（525～528）とその左注

右、郎女は、佐保大納言卿の女を。初め一品穗積皇子に嫁ぎ、
寵をうくること儻なし。皇子薨せし後、藤原麻呂大夫この郎女
を嫁ふ。……

によつて明かである。藤原不比等の四男で京家の祖である麻呂は、養老五年六月二十六日に「從四位上藤原朝臣麻呂」為「左右京大夫」。（「続日本紀」とあるように、二十七才で都を治める要職に就いた。この八年後の神龜六年（天平元年）六月二十日「左京職獻龜長サ五寸三分、闊サ四寸五分」ナル。其背ニ有文云、天王貴平知百年ト。」（「続日本紀」とあり、更に同年八月五日の、神龜を天平と改元した時の宣命（六詔）の中にも

平と改元した時の宣命（六詔）の中にも
現 神ノ御 宇……京職大夫從三位藤原朝臣麻呂等負ル
龜一頭獻止奏賜此所聞行……

とあるように、麻呂は行政の手腕もあつたようであるし、『懷風藻』に四首（現存本）の五言詩と、一篇の詩序を残す文人でもあつた。

郎女と麻呂の關係がいつ頃始つたかについては、契沖の『万葉代匠記』精撰本に

京職大夫とかけるにてしりぬ。此哥は養老五年以後の哥なりと素直に左注の官職に注目した説が最も妥当ではないかと思われ。すなはち、右に引用した続紀の記事でも分るように、京職大夫として権勢を振つていた時期の恋愛であつた。麻呂の歌は、相聞の歌としてもかなり激しいもので、第三首目の

524 むし袞なごやが下に伏せれども妹とし寝ねば肌し寒しも
の歌は、卷十四

3354 伎倍人のまだら袞に綿さはだ入りなましもの妹が小床に
などを思わせる直截な物言いで、それに和えた郎女の四首の歌の方が、前稿で述べたように、起承転結の構成、語戯を生かした点など、余裕のあるものである。

527 来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じ
と言ふものを

の「来」を繰り返す技法

528 千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば
の結句に「長く」を懸けているところなど、麻呂とほぼ同年令の郎女にして始めて出来るものであり、逸る麻呂を巧みに受け止めている女歌であると言えよう。

ところで、異母兄旅人が、大宰府から藤原房前（不比等の第二子で北家の祖、時に正三位で参議）へ、夢に見た話に事寄せて「梧桐

の日本琴やまとこと」を送つた事は、よく知られており、その子細は卷五の書簡と歌（810・811）によつて明かである。これは、年こそ十六程若いながら、朝廷において政治に参画し、中衛府大将であつた房前に宜みを通じようとする旅人の必死の策であつた。それが効を奏したのかどうかは分らないが、その翌年・天平二年に旅人は都へ帰ることが出来たのであつた。実は、この件に関しては私は次のような仮説を持つてゐる。それは、この一連の出来事は、郎女が麻呂と別れて（距離的に）大宰府へ下る前から、麻呂との間で計画が為されていたのではない。当時、郎女を悩ませた事は、

1 氏上である旅人が、たとえ頭官とは言へ、大宰帥として老令の身で実際に任地へ赴いている。

2 高市皇子の子で、最後の皇親政治家と言われる長屋王が神龜六年二月十日「学まな左道さだ欲ほ傾国家」と言う密告で捕えられ死を賜つた。王は文人として佐保の邸宅に詩人・歌人を集め、藤原氏に対峙する氏族の旗頭であつた。

3 旅人の妻が、神龜五年大宰府で没し（147の左注）、旅人自身天平二年夏六月には、遺言を述べたいと思ふくらいに重体に落つた。（567の左注）

4 不比等の第三女光明子が、天平元年八月、臣下として初めて皇后に立ち、藤原氏は聖武朝において万全の体制を整えた。

皇後に立ち、藤原氏は聖武朝において万全の体制を整えた。この事態を打開する為に、急遽大宰府へ下つた郎女は、当時麻呂との間も繋つていて、その誼で旅人は房前に「倭琴」を贈る事になつたのではないか、というのが私の考えである。更に言えば、名門大伴

氏の頭領が、新興の藤原氏に帰京の早からん事を依頼しなければならぬ(天平二年夏の病が一応癒えたとは言え、老令病身であつたと思われる)苦しさか、「讃酒歌十三首」を生んだのではないだらうか。そう考えると、

338 験なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし
341 賢しきと物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするしまさりたるら

し
348 この世にし楽しくあらば来む世には虫にも鳥にも我れはなり
なむ

のような、激しい悲痛な叫びの歌も理解できるのである。
麻呂と郎女の贈答歌からここまで考えるのは、危険な気もするが、郎女の歌全体から考えて、また左注の内容、当時の大伴氏をとりまく状況、歌の効用などから右のように考えてみた。

大宰の大監大伴百代の恋の歌四(559~562)の直後に、郎女の歌二首がある。

563 黒髪に白髪交り老ゆるまでかかる恋にはいまだ逢はなくに
564 山菅の実ならぬことを我れに寄せ言はれし君は誰れとか寝ら

む
この二首は百代の第一首と第四首

559 事もなく生き来しものを老いなきにみにかかる恋にも我れは逢へ
るかも

562 暇なく人の眉根をいたづらに搔かしめつつも逢はぬ妹かも
を受けて詠まれたものであるが、二人を恋愛関係にあると見るより

も、「萬葉集私注」土屋文明が説くように

按ふに百代が通行の民謡に若干自分の創意を加へて宴などで誦したものであらう。

とする観方が当を得ていると思う。(但し、百代の作を坂上郎女に贈つたとは「私注」は全く考えていない。その点は私と考えを異にする。)帥旅人の下で大監を務めた百代は、「梅花の宴」での歌(823)を旅人に續いて残しているし、先述の旅人重体の折には、勅命で都から見舞いと遺言を受けに来た、旅人の異母弟稻公と甥胡麻呂を送別する役を受持つている。その生没年ともに不明であるが、続紀によれば、天平十年外従五位下兵部少輔以後、美作守、鎮西副將軍、豊前守を歴任、天平十九年正五位下に昇つたことが分る。當時大宰府に、大伴氏関係の人としては、防人司さきもりのつかさのすけ 佑大伴四綱(329・330)がいて、帥旅人に親しく歌を詠みかけている。

330 藤波の花は盛りになりけり奈良の都を思ほすや君

それに対して旅人は

331 我が盛りまたをちめやもほとほとに奈良の都を見ずかなりな

む

と素直に心を打開けている。これと同じ関係が、百代と郎女の先に挙げた歌の間に感じられるのである。帥の異母妹だからではなからうが、百代は精一杯の好意を、恋の歌四首(四首歌の特異性については前稿で述べた)で構成して表現したのである。歌の主題提示の第一首から、結びに至るまでが型に倣つて反つて感動がないのは、右のような事情であれば当然で、むしろ挨拶の歌とも言うべき四首である。もちろん、それは承知の上で郎女も二首を返しているこ

とは、563と564の突然の変化にもよく窺えるのである。特に564は、百代の次の譬喩歌(卷三)

大宰大監大伴宿祢百代が梅の歌一首

392 ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らず来にけり思ひしもの
を

を知っているの作だと思つたので、よけいに百代に応えたのではなからうか。同族の男女とは言え、郎女と百代の歌のやり取りは、歌の世界がいかに広がっていたのかを示す好個の例である。

郎女が大宰府から帰京した後に、活甕に作歌活動をし、その詠歌対称が専ら同族の人々に対してであることは、既に小野寺静子氏によつて前に掲げたように指摘されているのであるが、今は、その実態を私なりに丁寧に見ていきたい。「大伴坂上家の大嬢、大伴宿祢家持に報へ贈る歌四首」(581~584)は、十才前後の大嬢の作とみるよりも、通説のように郎女の歌と見る方が当つていと思われるが今は措くとして、そのすぐ後にある郎女の歌(585)について考えてみたい。

585 出でていなむ時しはあらむをことさらに妻恋ひしつ立つ立ちて
いぬべしや

この「妻」を作者自身とした「萬葉代匠記」精撰本は

此ハ夫君ノ物ヘ行時、イタク別ヲ惜ミツ、行ニ依テヨメル歟

としたが、『萬葉集私注』や『萬葉集全註釋』武田祐吉、『萬葉集全注』巻第四木下正俊などが説くように、直前の歌である、

584 春日山朝立つ雲の居ぬ日なく見まくの欲しき君にもあるかも

大伴坂上郎女論 中

に抛つて、郎女が娘婿の家持に対して歌つたものと見るべきであらう。郎女と家持の歌における交情は後にまとめて論じなければならぬが、家持の最初期(年代の分る)の「初月の歌」(994)も郎女の「初月の歌」(993)に続いているし、それ以前、大宰府でも家持は郎女の世話を受けていたのであるからこそ、この「ことさらに妻恋ひしつ立つちて去ぬべしや」の強い物言いも頷けるのである。

『萬葉集全注』は、妻を「恋ふ」のが家持でさしつかえない事を考証して

このように考える時、今の歌の「妻恋しつ立つちて去ぬべしや」も見送る大嬢などに未練を覚えながら帰つて行くべきではないでしょう、とする通説を誤りとばかりは言えない。むしろ若い二人に物分りの良さを見せようとする郎女の思い遣りをそこに見るべきではないだろうか。

と説いている。大筋では賛成なのであるが、「若い二人に物分りの良さを見せよう」としたのかどうかは少しく疑問である。この点は『萬葉集全註釋』がこの歌について

歌の配列されてある位置から云へば、作者自身に關する妻恋では無くして、娘の婿に対して歌つてゐるのであらう。恋しいが帰るといふやうなことを言つた男を、引留めようとした母親の心なのであらう。

と述べているのが正しいと思う。更に言えば、「恋しいが帰る」と言っている家持にさうとうのプレッシャーをかけているように思うのは私の為にする解であらうか。

〔以下は下〕